

曾」に乗って帰ったのだが、その後ラポウルは大空襲、寄港したトラック島を出たらトラック大空襲。これが運命の別れ道だった。まったく私は、海軍、ミンダナオ島生き残りの幸運児だと今も感謝している。

今でも死んだ戦友や上司のことを思い出すのだが、ダバオに居た人たちは一年に一度は「ダバオ会」で会合しているが、話は何時も、ミンダナオ島の苦しみと、戦没者のことだ。あの遺体は、山の中のジャングルで、そのまま眠っているのか、厚生省で遺骨収集してくれているのだろうか。そのことを思いながらも、実役三年何ヵ月、加算で普通恩給受給資格はあると思っただが、学校期間だけ足らぬという。学校期間で、恩給と命のとり代えをしたかと、自分に言い聞かせている。

## 私の軍歴は陸軍と海軍 軍人と軍

属

京都市 四方 順 市

―四方さんの軍歴は随分長く、しかも陸軍と海軍を経験しているようですが、始めは陸軍ですか。

大正四年一月十一日綾部で生れ、徴兵検査は第一乙種です。その頃（昭和十年徴集兵）は甲種合格だけが現役入営でした。昭和十二年支那事変が始まったためか、その年の九月二十六日に教育召集が来て大阪信太山の野砲兵連隊の中で編成された高射砲（防空）第三連隊第二中隊に配属されたのです。

ですから最初は陸軍高射砲隊の召集兵というわけです。二ヵ月間基本教育を受け、訓練は中々厳しくて、初年兵の私はビクビクした日を送っていたが、十二月に召集解除。

勤務していた舞鶴海軍工廠に復帰して三年半程いた

ところ、日本の情勢も段々変わって世界の中で孤立してきた。工廠の中でも膚で感じるようになった昭和十六年五月八日、やはり臨時召集が来た。京都府からは二人だったが、大阪その他バラバラの混成部隊、右も左も誰も判らぬ人ばかり。

当時、加古川中部第四十部隊へ入隊し全員点呼、その他所要の点検、出発準備後、呉から貨物船で出港したが、時化で玄界灘が大荒れ、ほとんど食事も出来ない。釜山へ着いたら貨物列車で会寧まで直進した。何もかも満載して行つた。昭和十六年十月に一等兵に進級して、いよいよソ満国境警備ですが、今思うと、大東亜戦勃発前の闊特演で、国境に兵力を集結中という時期でした。

国境ではソ連兵の行動を監視しているのだが、冬ともなれば零下三十度、体が腫れ、耳が凍傷にかかり、ポロポロと皮膚や肉もとれてしまう者もいる。寒いより痛い。その頃、大東亜戦争も始まるし、各中隊から十人から十五人づつ出て行き、高射砲の連隊が一個大隊ぐらいになってしまった。

朝鮮第七四二三部隊であるが（写真を見せる）、戦友を送った後、今度は我々が移動することとなり、新義州の鴨緑江畔で要地防空隊構築中の所へ駐留した。兵舎は新義州の治安、鉄道警備の歩兵隊に同居していた。

鴨緑江の左岸（朝鮮側）三百メートル上流に陣地が出来て、そこへ移駐、高射砲第一三七部隊に編成替えとなった、新鋭の将校、下士官のバリバリの部隊である。部隊長も代わり、十七年二月上等兵に進級して、善行賞も貰った。

―防空隊の編成や勤務内容はどんなものだったのですか。

防空隊一個中隊は、高射砲四門、高射機関銃四銃、観測班と輸送班とある。高射砲は車両に積んで牽引車に連結して移動するのだが、ここでは鉄橋の要地防空隊だから、陣地に砲を据えつけ、仮兵舎を作っていた。周囲は柵がしてあってかなり大きな陣地であった。砲一門に十五人ぐらだから四門で六十人、他に観測、監視、輸送隊で編成されていた。敵機を監視発見し、

これにより高度、方向、角度を観測して、砲に連絡して、隊長の射撃命令が出る。

訓練、演習はかなり厳しいが、実際の爆弾投下や機銃掃射はなく、また実際の射撃はなかった。警備の歩兵部隊は市街地に在り、朝鮮部落との交流はあった。

しかし、警備隊や防空隊の兵隊は悪いことは一つもしなかったし、物資の交換や落花生売りなど来ても金はきちんと払っていた。

兵舎の内務で、私は二年兵だったが、初年兵で酔うと暴れる柔道三段と称した猛者が私の身の廻りを世話してくれていた。兵隊にはいろいろな人が居て、特に内地を離れての軍隊生活だから、唯命令だ、上官だけでは駄目な場合があったように思われる。

昭和十八年八月三十一日、いよいよ召集解除ということになったが、隊長から「残留して下士官になれ」と言われたが、十七年に妹が死んでしまったので思案したが、帰還することに心で決めた。隊長は、その理由を聞いて無理には引き留めないで内地へ帰ることになった。

新義州から釜山、台湾航路の「昆林丸」（七千トン級）に便乗して長崎に上陸した。その船は台湾へ出帆してから間もなく、魚雷を四、五発打ち込まれて沈没したと聞いた。一緒に乗っていた人が多数死んだらう。おしいこと、気の毒なことと思った。

十八年も後半になると日本の近海にも敵の潜水艦が出没して、一般の船舶が随分犠牲になっていたらしい。

私は無事に綾部へ還ったのだが、故郷では逆に朝夕、「万歳、万歳」で出征兵士が送られていた。私は身を縮める思いで家に帰った。九月十日に舞鶴の海軍工廠へ復帰の報告に行った。私は工廠で十年間の経験があるので一等工員だった。帰ったとたんに今度は海軍技術下士官ということになった。だから私は、軍属から海軍軍人ということになったわけです。

—それでは、海軍技術下士官としての勤務の内容と、戦争末期の内地、特に工廠の状態を話して下さい。

舞鶴の工廠に帰って技術下士官となったので、横須賀航空廠、川崎重工業、佐世保にと研修に行った。その間、舞鶴は二回空襲を受けている。第一回の時は湾

内の掃海艇が一隻やられ、二回目の方は、工員が多く死んだ。朝、夜勤交替の時五〇キロ爆弾を落されたので、貨車は煎餅のようにベチャッコになり、工廠の窓硝子はほとんど破れた。下から高射砲や機関銃を射つ、上から爆弾を投下されたり機銃掃射を受ける。軍隊の時より大変だった。

分遣されて教育を受けていた機関学校でも随分やられた。横須賀の時は鎌倉付近でグラマンに掃射され、列車の窓硝子にもブツブツと穴があいた。馴れた人は横へ皆寄ったが、私は何もすることが出来なかった。

軍隊では覚悟をしていたから、恐ろしいなどとは思わなかったが、内地での丸腰の時の方がこわかった。

研修では特攻機のエンジンの組立てに関し指導を受けた。研修者は各工廠から来ていて、教官は横須賀航空廠（友永海軍中将が長）の人たち。私は舞鶴工廠から一人よこせといわれて参加したので、友永中将に申告をした。研修する場所は迷路のような所で、トンネルを入ったりして、今でも何処だったのか判らない。余り公表されぬ所、秘密の場所だったのだろう。研修

生は行く前に身分を厳しく調べられ選抜されたという。

教育内容は軍事機密に関するものが多く、新しい技術で未だ公表されていないのだが、速やかに各工廠で実施させねばならぬものだった。我々は教育が終わると直ぐ帰って、自分の工廠で技術者や、工員の長などに教育した。このような海軍の特殊勤務のためか、終戦まで陸軍の召集はありませんでした。

これが、陸軍、海軍の軍人、軍属の経歴のあらましで、このような経験者は余り無いと思う。しかし、この特殊任務が無かったとしたら、当然再召集があり、何処かの戦場か、輸送中雷撃などで戦没していたかも知れない。我々の世代は、命がけの戦争に参加しなければならなかったのだから、「若し、あの時、あの場でこうだったら」という生死の別れ目と常に遭遇していたということを、後世の人に知っておいて貰いたいと思う。